
エキストラ

陸たまき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エキストラ

【Nコード】

N4969I

【作者名】

陸たまき

【あらすじ】

女優志望の女の子と、監督志望の男の子の話。

都内某所のとある公園、日曜日。
私は映画の撮影に臨んでいた。
……エキストラだけだ。

「あ、ちよつと君達」

監督が、ベンチに座っている私に声をかけた。

「は、はいっ！」

慌てて返事をする、誰かの声と重なった。見れば隣にも人がいる。

「君達カップルみたいにいちゃいちゃしてて」

「は……」

それだけ言うと、監督はさっさと行ってしまった。

私はもう1度ゆっくりと隣を見る。

チェックのシャツ。カーキのズボン。縁の無い眼鏡に、さらさらの茶色の髪。歳は私より少し上くらいだろうか。

「……………」

まさに、理想のタイプがそこにいた。

…こ、この人と恋人のふりをすると…？

ぽかんと見つめていると、眼鏡の奥の優しい瞳がにっこりと微笑んだ。

「よろしく」

言われて私も俄然やる気が沸いてきた。

仮にも私は役者志望！こんな事くらいでつまづいてどうする！

「よろしくお願いします！」

言いながら、自分でもちよつとゲンキンかもと思う。

彼は困ったように頭に手をやった。

「で、どうしようか……」

「ま、まずは役作りをしましょう」

私は少し緊張しつつも話を続ける。

「えーと、とりあえず2人はデートをしてるんですよね……」

日曜日の昼下がり。

もうすぐ彼の誕生日。だから彼女はプレゼントを探している。

大学生の彼は毎日忙しくて疲れてるんだけど、そんな彼女の気持ちを知ってるからか笑ってお店巡りに付き合っている。

お昼を食べて、まだ歩き回ろうとする彼女に、彼は笑ってこう言う。

「ちよつと休もうよ」

そばにいるだけで、嬉しいんだから……。

「——ぷっ」

笑い声にはつとすれば、彼は口元を押さえて笑いを堪えていた。

私は恥ずかしくなつて顔を赤くする。

初対面の人に言うことじゃなかったかも……。

「あ、違う。ごめん。なんか、本当に演じるの好きなんだな——って」

目じりに浮かぶ涙をぬぐつて、彼は手を差し出す。

「……?」

「手、つなごうよ」

「……ああ」

我ながらぎくしゃくとした動きで手を重ねると、彼の手は私の手をすっぽりと包みこめるくらいに大きかった。それに、意外に骨っぽ

い。

（私っては何考えてんの…！？）

「…………あのさ」

「は、はい？」

「座ってるだけじゃ、いちやいちやしてるようには見えないと思うんだけど…」

「そう…ですよね」

「あの敬語も止めよう。雰囲気作れないし」

「あそつか」

そこでようやく目が合った。体が緊張して強張ってしまつ。

それを感じてか、彼が気遣わしげな視線を向ける。

「大丈夫？」

「うん」

私は大きく頷いた。

エキストラと言えども立派な仕事だ。仮にも役者志望が、こんなことでもいいわけない！

そう、言うなれば今の私は、ライバルに吞まれちゃってるわけじゃない。

「大丈夫よ、太郎さん」

「たろう…？」

「名前。あつた方がやりやすいでしょ？」

「じゃあそっちは…花子、とか」

「安直ね」

「そっちこそ」

私たちは顔を見合わせて笑った。

「3、2…」

噴水の前のベンチで手を繋いで座る男女。

彼女が楽しそうに笑うと、彼も笑みを浮かべて顔を近づける。

何か会話をして、再び笑い合う。
不自然なほどに――……ラブラブなカップル。

「カア——ットー!!」

監督の野太い声が響く。

「君ら不自然すぎる！もつと自然体で！」

私たちに言われたとは気づかず、反応が遅れてしまう。

「会話してるだけでいいから！それだけで恋人だとわかるように！」

「はあ……」

彼も困っているらしく、すっきりしない返事だ。

「もつと自然に……？」

私の肩を、太郎が軽く叩いた。

「すげ、俺ダメ出しされたのはじめて」

思わず私は吹き出した。

「……あ、でも私もだ」

エキストラの所まで来て注意する監督なんて初めてだった。

「だから好きなんだよな」。渡辺監督

主役と話している監督の後姿を見ながら、彼はうつとりしたように呟いた。

「監督が好きなの？」ちょっと意外に思いつつ私は言った。役者志望なら憧れるのは役者さん、というのが普通だ。

「あ、俺映画監督になりたいんだよね」

私は目を見開く。

「じゃあなんでエキストラなんて……」

「いや、やっぱり生の現場を見てみたくてさ」

「へえ……すごいね……」

嬉々として、でもどこか誇らしげに語る彼の横顔は、とても格好よく見えた。

迷いなんかなくて、ただ真っ直ぐに、夢に向かって進める人。

……少しだけ、羨ましかった。

「すごくないよ」

照れくさそうに彼は笑った。

「そんなこと言ったら花子だってすごいじゃん。さつきも、演技してる時、まるつきり別人だったし。思わず引き込まれちゃったし」

「あー、あれね……。ついなっちゃうんだ。どうも、役作りとかちゃんと出来なくて……」

肩を落とす私に、彼は息巻いて言う。

「違うよ。それってすごいことじゃん！ きっと大女優になれるって！」

「……………」

顔が赤くなるのがわかった。

だってこんな事を言われたのは初めてだったのだ。

「太郎だってなれるよ、きっと。未来の大女優が予言します」

照れ隠しにそう言い返すと、一瞬瞬きをした彼は、照れくさそうに笑顔で答えた。

「なんかやる気出てきた。……実はさ、映画監督になりたいって、誰かに言ったのはじめてなんだ」

「うそ……………私も」

太郎は驚いた顔をした。

「事務所とかに入ってんじゃないの？」「小さい頃は劇団に入ってたんだけど、お金が続かなくて」

「あー、金がかかるよな。俺もさ、撮影系の学校行きたいんだけど、出来れば海外の。でも親はまだ認めてくれないし、自分1人で出せる額じゃないし。かと言って、普通の大学行っちゃってやりたい事もないし……」

（高校生だったんだ……）

その事実にはまず驚いた。大人っぽいから大学生くらいだと思っていたのだ。

確かに愚痴の言いつぶりを見ると、同年代だなーと思うけど。

「ま、諦める気はないけど」

前を見据えて、彼は口元に笑みを浮かべる。

「…… かつこいいなあ……」

「えっ」

「よし。私もがんばろ」

実は悩んでいたのだ。

高2になると周りは進路の事を口に出してきて、友達は当たり前のように堅実な道を選んではる。

でもやっぱり、やりたい事をやるのが1番だ。たとえそれで成功しなくなつて、後悔するよりずっといい。

「ありがと。太郎のおかげで元気が出た」

「……… はあ」

その抜けた答えに、私は思わず声を上げて笑ってしまった。

「設定を変えよう」

言い出したのは彼だった。

「太郎と花子は久しぶりに会った恋人同士なんだ。お互いに、離れてた間の話をしてる」

確かに、そうすれば私たちの初対面のぎこちなさも変ではない。

「いい監督さんになれるよ」

関心して私が言うと、彼は照れ隠しの、あの少しだけ怒った表情を浮かべて私の頭を小突いた。

「茶化すなよ」

かあああつ！と、顔が赤くなる音がした。

「え？」

彼の声を遮るように、スタンバイの声がかかる。

手をつないで、彼の肩に頭を乗せて。

「どうしてた？」

頭の上から聞こえる、彼の少し低い声。

私は頭を上げる。にっこりと笑って。

「毎朝6時に起きて、普通に学校行ってた。友達と遊んで勉強して、部活してごはん食べて、すごい普通」

彼は笑いながらもちよつと残念そうな顔。

「でもね、本当は寂しかった。太郎がいなくて。例えばね、そうだなあ…。授業中ふつと外見た時とか、朝起きた時とか、帰り道とか、会いたいなあ声が聞きたいなあって、いつも思ってた」

ふつと笑みを浮かべて彼が言う。

「経験者？」

私も笑い返す。

「半分ね」

不思議だった。いつもは全然別の自分が演技をしてるのに、今演技しているのは私自身だ。

彼から視線を外して私は話を続ける。

「主演の男の子、いるでしょう？…同じ劇団だったの。同期だね。でも今すっごい差があるでしょ？憧れって言うか妬ましいって言うか、いつも思い出すの。すごい綺麗な景色を見た時とか、感動する映画を見た時とか、おいしいものを食べた時に、あいつならどういう風に思っただろう、どうやって表現するんだろうって、よく考える」

「そっか…」

「でも、明日からはきつと太郎の事も思い出すよ」

彼が驚いて息を呑む音が聞こえて、照れくさくなってわざとおどけてみせる。

「未来の監督さんは、これをどういう風に撮るんだろうって」

「…花子」

彼が私の肩をつかんだ。頭を起こすと、彼と視線が合う。

「あのさ」

どことなく焦った様子だ。

じつと私を見つめてくる。

「何？」

つられて私の心臓も早くなる。彼の顔が少し近づいた。

「本当の名前、教えてくれないか」

「へ…」

「また会いたいんだ。友達になろうよ」

「……………」

私は脱力してしまって、かえって自然に笑うことができた。

「なんだ…。キスされるのかと思った…」

「だ、だって、まだ知り合ったばかりじゃん」

赤い顔をして慌てる彼がおかしかった。

相変わらず笑っている私を、彼は少し怒ったように見つめている。

「…でも…」

彼の手が私の手に重ねられる。

私は笑みを消して彼を見つめた。眼鏡の奥の瞳は、どこか笑っているようで、真剣だった。

「会ったばかりだけど…」

「カ——ット——！」

渡辺監督の野太い声が響き渡り、

初めてのキスは、未遂で終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969i/>

エキストラ

2010年10月28日00時57分発行